

は、味覚障害、脱毛、口腔粘膜炎、薬剤熱、稀に巨乳房症を招くことがある。

コルヒチンは細胞分裂抑制、白血球遊走阻止のほか、線維化を抑制する作用があり、SScの皮膚硬化を抑制することを期待して用いられることが多い。コルヒチンの副作用は、下痢、生殖器の機能抑制、特に無精子症などがある。

■ 戦略3：治療経過と予後

SScの免疫異常、炎症反応に対しては、全身性結合組織疾患の中では、この異常は他の疾患ほど目立たないが、報告によると、自己抗体の出現は

95%以上に上るといわれている(表3)。

免疫異常、炎症反応に対しては、ステロイド、NSAID、免疫抑制剤などが用いられるが、効果は炎症反応の強い例には認められることがあるものの、慢性期の炎症反応が鎮静化した例では期待されたほどのものではない。

文献

- 1) Le Roy EC, Silver RM, Medsger TA Jr, Steen V : Systemic sclerosis and related syndromes, Schumacher HR (ed) : Primer on the Rheumatic Diseases, 10th ed, pp118-127, Arthritis Foundation, Atlanta, 1993

書評

猿田 享男・斉藤 郁夫・河邊 博史・中里 優一 訳

カプラン臨床高血圧

日和田邦男(愛媛大学医学部第2内科)

昨春、Kaplan教授の名著“Clinical Hypertension”の第6版が出版された。本書は、日進月歩の高血圧に関する進歩をいち早く取り入れ、世界的レベルにおける最新の高血圧の疫学、病因、診断、評価と治療に関する知識を提供して、世界的に高い評価を獲得している。また、医学はどの分野においても進歩が著しく、一人で一冊の本を執筆し、改訂を重ねていくことは至難の技であるが、それを見事に実現し、成功させているのが本書である。

現在、高血圧に関する書物は、世界的に見ても専門的な大著であったり、わが国でもその全貌を過不足なく記載しているものがないなど、適当なものが見当たらない。このような状況の中、本年4月、『カプラン臨床高血圧』が原著の出版からわずか1年で医学書院MYWから出版された。しかも翻訳者は、Kaplan教授の高弟の一人である慶應義塾大学医学部内科の猿田享男教授を筆頭に、現在高血圧の領域で活躍されている斉藤郁夫助教授他2人で、Kaplan教授の意図するところを十二分に酌み取って翻訳が行われている。

以前、原著の第3版は、猿田教授らにより翻訳されているが、その版は1982年に刊行されたものである。その後、アメリカ合同委員会の「高血圧の発見、

診断および治療に関する報告」の3度の改訂や、WHO/ISHの「軽症高血圧の管理に関する指針」の発表と3度の改訂などさまざまな状況の変化がみられ、新版の翻訳が求められている時期でもある。

翻訳には、筆者の経験からいってもいくつかの問題が付きまとうが、本書は学術書の翻訳にしばしば見受けられる堅い日本語ではなく、日常的で明快な日本語に表現し直されているので大変読みやすい。また、訳者追補として「高血圧治療ガイドラインと日本における現状」と、わが国で発売されている降圧薬の一覧が加えられており、日本の読者にとって役に立つ本づくりが心掛けられている。

最後に一言付け加えると、原著の日本における定価は13,905円であるが、本書は10,300円ある。この点も読者に対する大きなサービスである。

本書は第一線の臨床家が座右に置き、日常臨床の場で最も多く遭遇する高血圧患者の診断、治療に役立つ本である。また、若い研修医や循環器の専門家にも必読の著書である。高血圧に興味をもつ医学生にぜひ読んでもらいたい。

(B5判 504頁 10,300円(税込) 1995年)
医学書院 MYW刊